

絵地図から見た寛保2年・戌の満水

Kampo 2 (1742) "Inu no Mansui" Flood as Depicted in an Illustrated Map

原田和彦

はじめに

①戌の満水について

②長野市立博物館所蔵の災害絵図

③寛保満水後の復興策

まとめ

【論文要旨】

寛保2年(1742)の8月、信濃の北部を流れる千曲川・犀川が大洪水をおこした。この洪水によって多くの被害がもたらされた。この洪水のことを北信濃では「戌の満水」と呼び習わしている。

長野市立博物館には、この「戌の満水」の被害状況をあらわしたといわれる絵図面が伝わる。この絵図面は、洪水前の様子と洪水後の各村の被害状況を克明に示している。また、山崩れや土砂災害の場所まで描かれている。災害をあらわした絵図面としては、信濃に残るものとしては非常に古い部類に属する災害絵図である。ただ、この絵図面が「戌の満水」の被害状況を示した絵図面であるとの根拠は、絵図面が入っていた袋の表書によるだけである。

本稿では、まず「戌の満水」の被害状況を、当時の松代藩の被害届から抽出する。これによって、被害届からわかる「戌の満水」の被害状況を描き出す。また、いちじるしい被害をうけた松代城下についても、当時書かれた見聞記にてらして、川の水がどのように城下町に押し寄せたかなどを検証する。このように当時の記録類などから「戌の満水」の被害状況を描き出すという作業を行っている。

こうした基礎作業をもとに、そこから前出の「戌の満水」の被害絵図について、その被害状況を抽出し、その上で記録類から導き出した「戌の満水」の被害の様相と照合し、絵図面の性格付けを行った。

「戌の満水」の後に松代藩ではさまざまな復興策を試みる。このなかで、松代城下を洪水から守る方法として千曲川の流路を改める作業がなされた。洪水後の松代藩の復興策をこうした千曲川の流路変更という面から考えてみた。

はじめに

寛保2年(1742)7月の終わり頃から8月はじめにかけて、全国的な大水害がおきた。北信濃にあって、千曲川・犀川という大河川やその支流では、現在までにおきた水害のなかで史料上確認できるうち、最大の被害をもたらすものとなった。この水害のことを、北信濃では「戌の満水」と言いあらわすようになった。

本稿は、主に長野市立博物館が所蔵する「戌の満水」の被害状況をあらわした災害絵図の紹介と、その資料的価値を位置づけることを目的とする。

①……………戌の満水について

(1) 戌の満水の概略

寛保2年の「戌の満水」(以下、戌の満水という。)は、近年刊行が続いている長野県内各地の市町村史(誌)で、必ずといってよいほど記述される事項である。

昭和4年に刊行され、現在も引用されることの多い『松代町史』⁽¹⁾では次のような記述となっている。

7月28日丑満時から降り始めた雨が29日になっても降りやまず、黄昏時になって豪雨となった。千曲川の水かさは刻々と増し、8月1日にはとうとう堤防が決壊することとなった。山は抜け濁流は田畑を埋没あるいは流失させ、集落の人家を流し、多数の人畜を殺すに至った。雨は1日の夜には漸くやんだ。千曲川の満水は雨がやんだ2日までがピークであった。

このような大きな水害をもたらした要因は、台風であった。台風は大坂周辺に上陸して東北の方角にすすみ、中部・関東をへて東北地方に出、三陸沖に抜けたとされる⁽²⁾。千曲川流域での被害は甚大で、信濃国内の上流から下流域までは山崩れや満水による田畑、集落の冠水が目立った。松代領を中心とする善光寺平の被害は、「千曲川が犀川と合流して大河となり水量も増大する地域なので、被害も甚大となった」といわれる。また、「松代藩郡奉行の中間報告によれば、領内の被害合計は、冠水田畑6万1624石余(182カ村)、山抜け988カ所、流れ家1731軒、潰れ家857軒、半潰れ254軒、流死1220人、流れ馬64匹、流木921本」と報告され、その後「用水堰の埋没破損3万3797間、堤防の決壊1万485間、橋の流失大小197カ所、道路の破損3万1641間」が追報告された⁽³⁾。

(2) 松代藩被害届からみた各村の被害

さて、この水害の様子を、もう少し詳しく検討する。注目すべき史料として、85カ村にわたる国役金170両の延納を願いでたものがあげられる。寛保2年11月、郡奉行の小松忠左衛門によってまとめられ、御勘定所に提出されたものである。この願い出によって延納が許された⁽⁴⁾ことが、この史料の付箋の記述によってわかる。また、この史料については多くの市町村史(誌)が引用しており、とてもよく知られた史料でもある。これら市町村史(誌)のうちで近年刊行された『更埴

⁽⁶⁾市史」にあっては、これをデータ化して水害の様相にせまろうと試みている。この点は後述したい。

さて、この史料にあらわれる85カ村は、村ごとにその村高（石高）と水害による損耗高とが記されている。配列は水内郡の村々からはじまり、更級郡、埴科郡、高井郡と続く。たとえば水内郡布野村（長野市柳原）を取りあげると、

(信濃国水内郡)
同国同郡

一高四百拾壹石七斗 布野村

内

百四拾四石五斗八升四合 川欠荒地永引

三拾五石八斗三升 川欠石砂入四五年之内可立返候

百三石三斗壹升貳合 当戌年一毛損毛小以貳百八拾三石七斗貳升六合

残高百貳拾七石九斗七升四合

右同断

(右之通残高少々御座候得共、高役金取立候様ニ無御座候間、残高之分共高役金年延之儀奉願候)

このように記されるのであるが、損耗高については各村の①山抜・川欠荒地により永引の石高、②石砂入ではあるが4,5年のうちには立返る土地、③当戌年だけの損耗、の三つの分類がなされ、この三つの総計が損耗高となっている。記載方法は各村で該当するものがあれば記するというものである。

このように損耗高については各村で三つの分類がなされているのであるが、ここでは便宜上、三つの損耗高の合計を用いて検討することとした。

表1-1はこの史料をもとにして、村高に対して水害による損耗高合計（前記の①②③の合計）の比率（これを損耗率ということとする）が45%以上の村を示したものである。この表から、地域区分したものが表1-2から表1-6である。

表1-2から表1-4は千曲川流域のものである。表1-2は松代藩領の上流域から松代城下までの間の村である。表1-3は松代城下附近を示す。表1-4は城下から下流域までの村を示している。

表1-5は犀川と千曲川の合流点を示している。表1-6は犀川・千曲川には直接沿ってはいないが、両川に流れ込む支流域の村を示している。

これらの表から導き出せることを検討しておこう。

表1-2をもとにして考えてみよう。松代領のうち千曲川上流域の村についてであるが、まず松代領でないためこの表には示されていないが、松代領に囲まれており検討を必要とする村である中之条代官所支配の村について、史料にそって見ておきたい。

安永8年（1779）に作られた中之条村（坂城町中之条）の村明細帳⁽⁷⁾の記述に、水帳が失われていることが記されている。その理由として「寛保二戌年山崩ニて谷川夥敷満水仕、庄左衛門宅え石砂泥等押入、四五尺押埋メ申候」とある。また、同帳の別の項目には、「西方千曲川、南地境横尾村谷川西江流、満水之節当村田畑江押入、北方地境坂木村名沢谷川当村田畑江押入、東御堂谷川北西江流れ、満水之節四方より押入難儀仕候」とある。

中之条村は、西に千曲川が流れ、坂木村（坂城町坂城）との境（北側）には名沢川が流れる。また御堂川が北西に流れている。南は横尾村（坂城町南条）と接しているのであるが、横尾村の南には谷川が流れている。中之条村の水害は、村の南側では千曲川に満水状態になった谷川が流れ込み、北では名沢川が濁流となって押し寄せ、御堂川にいたっては、四方に川が決壊して押し寄せたというのである。このように中之条村においては、その水害は、千曲川の満水というだけではなく、むしろ、千曲川に流れ込む三つの河川によって引き起こされていたことがわかる。また、御普請所が御堂川にあったが、寛保の洪水の後、村方で自普請したことも記されており、御堂川が中之条村においては、戊の満水以前にあっても、水害の際にはとても危険な河川であったことがわかる。

次に埴科郡金井村（坂城町南条）の史料⁽⁸⁾を見てみたい。金井村は中之条村の南側、横尾村を隔てて隣り合う村である。これによれば、千曲川と村の北を流れる前述の谷川は翌春に普請の予定であったが、水難によって不可能になったとする。このことからすると、谷川が戊の満水によって壊滅的な被害をうけたことがわかる。また、前々から御普請所が谷川にあったこともわかる。

このように、中之条代官所領であった現在の坂城町・戸倉町周辺においては、谷川、御堂川、名沢川という千曲川に流れ込む小規模の河川が大きな被害をもたらしていたのである。

千曲川を少し下流にくだった村の様子をあわせてみておこう。

埴科郡寂蒔村（更埴市寂蒔）の史料⁽⁹⁾によれば、矢代堰の増水によって、さまざまな被害が報告されている。この矢代堰は、中之条代官所領7カ村と松代藩領11カ村の18カ村によって管理されていたが、大満水によって用水路が悉く埋もれてしまっていた。殊に、松代領の徳間村（戸倉町）、内川村（戸倉町内川）、千本柳村（戸倉町千本柳）、などは田地に大砂が入ってしまったという。

現更埴市周辺においては、矢代堰が水害の一因となり、下流域の村に被害を与えたことが想像される。⁽¹¹⁾この点については『更埴市史』が同じような手法によって水害の様相を復元している。要点だけここで触れておこう。

現更埴市域での水害による被害は平均で全農地の72%強であったことから、他地域よりも被害が大きかったことを示している。ただ被害の様相には違いが見られ、桑原（更埴市桑原）・森（更埴市森）・倉科（更埴市倉科）・生萱（更埴市生萱）の村々はいずれも山沿いの集落で、山崩れや三滝川の氾濫によるものと考えられる。一方、本八幡（更埴市八幡）・向八幡（更埴市・戸倉町）・粟佐（更埴市粟佐）・矢代（更埴市屋代）・雨宮（更埴市雨宮）・土口（更埴市土口）の村々は、千曲川が決壊することによって村が流失してしまった。千曲川の冠水による被害が大きかったのである。また、千曲川の対岸の桑原村にあっては、佐野川の氾濫に伴う被害である。⁽¹²⁾

更埴市におけるこれら戊の満水の様相は、近隣の岩野村（長野市松代町）についても同様な結論を導き出せよう。

以上のように、松代領の千曲川上流域における被害は、千曲川の水量が増えたために村が水害に見舞われただけではなく、千曲川に流れ込む河川や、用水による土砂災害や濁流もあったのであり、同じ水害でも村々で様相を異にするものであったといえる。

表1-4についてみてみよう。

これは城下から下流の村についてのものであるが、ここでは中小河川の土石流というものではなく、千曲川の水かさが増え、堤防が決壊したことによる被害が多かったと想定される。なぜなら、

表1 寛保2年戌満水・松代領内村別損耗率集計表 45%以上（単位：石）

1

郡名	村名	村高	戌年1毛損	戌損耗率
水内郡	南長池村	487	224	46.0%
水内郡	小島村	730	453	62.0%
水内郡	中俣村	652	377	57.8%
水内郡	南堀村	355	177	50.0%
水内郡	下越村	246	125	50.6%
水内郡	押鐘村	236	109	46.2%
水内郡	宇木村	406	194	47.7%
更級郡	山田新田村	41	24	57.9%
更級郡	二ッ柳村	1,075	571	53.1%
更級郡	高田村	831	417	50.2%
更級郡	御幣川村	597	426	71.4%
更級郡	会村	664	433	65.1%
更級郡	小松原村	907	413	45.5%
更級郡	真島村	1,639	847	51.7%
更級郡	杵渕村	549	250	45.5%
埴科郡	内川村	438	280	63.9%
埴科郡	矢代村	1,703	912	53.6%
埴科郡	雨之宮村	1,986	1,010	50.9%
埴科郡	森村	1,389	1,036	74.6%
埴科郡	倉科村	862	508	59.0%
埴科郡	生萱村	432	349	80.7%
埴科郡	土口村	293	177	60.3%
埴科郡	清野村	1,033	675	65.3%
埴科郡	関屋村	339	165	48.6%
埴科郡	平林村	278	127	45.9%
埴科郡	桑根井村	146	85	57.9%
埴科郡	牧内村	158	91	57.5%
埴科郡	東条村	1,101	443	40.2%
埴科郡	加賀井村	143	78	54.7%
埴科郡	東寺尾村	821	448	54.5%
埴科郡	柴村	234	118	50.4%
高井郡	保科村	1,451	725	50.0%
高井郡	宇原村	36	24	65.3%
高井郡	大熊村之内	559	287	51.3%

2

郡名	村名	村高	戌年1毛損	戌損耗率
更級郡	山田新田村	41	24	57.9%
更級郡	御幣川村	597	426	71.4%
更級郡	会村	664	433	65.1%
埴科郡	内川村	438	280	63.9%
埴科郡	矢代村	1,703	912	53.6%
埴科郡	雨之宮村	1,986	1,010	50.9%
埴科郡	土口村	293	177	60.3%
埴科郡	清野村	1,033	675	65.3%

3

郡名	村名	村高	戌年1毛損	戌損耗率
更級郡	杵渕村	549	250	45.5%

4

郡名	村名	村高	戌年1毛損	戌損耗率
水内郡	小島村	730	453	62.0%
水内郡	中俣村	652	377	57.8%
更級郡	真島村	1,639	847	51.7%
埴科郡	東寺尾村	821	448	54.5%
埴科郡	柴村	234	118	50.4%

5

郡名	村名	村高	戌年1毛損	戌損耗率
水内郡	南長池村	487	224	46.0%

6

郡名	村名	村高	戌年1毛損	戌損耗率
水内郡	南堀村	355	177	50.0%
水内郡	下越村	246	125	50.6%
水内郡	押鐘村	236	109	46.2%
水内郡	宇木村	406	194	47.7%
更級郡	二ッ柳村	1,075	571	53.1%
更級郡	高田村	831	417	50.2%
更級郡	小松原村	907	413	45.5%
埴科郡	森村	1,389	1,036	74.6%
埴科郡	倉科村	862	508	59.0%
埴科郡	生萱村	432	349	80.7%
埴科郡	関屋村	339	165	48.6%
埴科郡	平林村	278	127	45.9%
埴科郡	桑根井村	146	85	57.9%
埴科郡	牧内村	158	91	57.5%
埴科郡	東条村	1,101	443	40.2%
埴科郡	加賀井村	143	78	54.7%
高井郡	保科村	1,451	725	50.0%
高井郡	宇原村	36	24	65.3%
高井郡	大熊村之内	559	287	51.3%

これらの村々には、水害の要因となるべき支流河川や用水が存在しないからである。

表1-6をみると、ここに掲げた村は千曲川や犀川とじかに接していない村である。主に、現在の長野市域に限定される村ではあるが、千曲川や犀川に流れ込む河川や用水の流域に主として所在する村である。南堀村（長野市南堀）・下越村（長野市）・押鐘村（長野市吉田）・宇木村（長野市三輪）は浅川や裾花川から取水される用水による影響を考えることができる。また、二ッ柳村（長野市篠ノ井）・高田村（長野市篠ノ井）・小松原村（長野市篠ノ井）は犀川から取水される川中島用水の三堰⁽¹³⁾によるものであろう。森村・倉科村・生萱村は、既述のように三滝川や矢代堰による影響が考えられる。

このほか、高井郡にあっては、保科川による被害をうけた保科村（長野市若穂）、仙仁川の被害をうけた宇原村（須坂市仁礼）、篠井川の被害をうけた大熊村（中野市）などがあつた。

表1-3、それに表1-6についてあわせてみてみよう。

松代城下への壊滅的な被害をもたらした河川として、関屋川・神田川があげられる。この川に面した関屋村（長野市松代町）・平林村（長野市松代町）・桑根井村（長野市松代町）・牧内村（長野市松代町）・東条村（長野市松代町）・加賀井村（長野市松代町）については甚大な被害をもたらしている。この点については次に述べたい。

(3) 城下の被害

城下に対する被害として、関屋川と神田川による水害があつたことを述べた。それではどのように城下に影響を与えたのかを考えてみたい。

城下町の被害は、橋の流失が3カ所、侍屋敷への水入り103軒、流家75軒、潰家106軒、流死人39人、流死馬が15疋と幕府に報告された。⁽¹⁴⁾ 武家屋敷の被害は甚大であつたことがわかる。

『松代町史』にはこの時の城下における水害の様子を見聞した記録が掲載されている。現在では所在がはっきりしないものの、その内容は史実を正確に伝えていると思われるので、これを用いることとする。

著者は浦野正英である。戊8月に満水の概要を記している。その奥書には、「右松代満水大通り書記申候、細成事は追て可加書候」とあり、松代城下の記述に比重が置かれたことがわかる。

さて、この見聞記によれば、松代城については、本丸と藩主の御殿があつた花の丸（三の丸）は床上6尺（床下から1丈）あつたという。また二の丸にいたっては椽上7尺の水があつた。このため、殿様は2日の四ツ時に船で花の丸御殿の玄関から開善寺に向かった。二の丸にいた豊三郎様は、四ツ時に大林寺へ船で向かっている。

このほか、城下での水害の様子は概略次のようであつた。

殿町の大御門のあたりでは、7尺の冠水があつた。馬喰町、清須町の人々は離山へ避難した。船を使って逃げ遅れた人を助け出すことも行われた。この救助活動は2日から始まり、3日の夜半には完了した。4日には離れ離れになった人を探しに山を下りた。紙屋町では、大信寺前の橋が落ちた。神田川は清須町へ押し切り、大信寺の寺中は大川となった。竹山町では、恵明寺の橋が決壊。この附近にあつた山寺氏が住む屋敷の長屋は三の丸まで押し流されるという勢いであつた。

紺屋町は水害というよりも、川から運ばれた砂が堆積するという被害がもたらされた。これは、

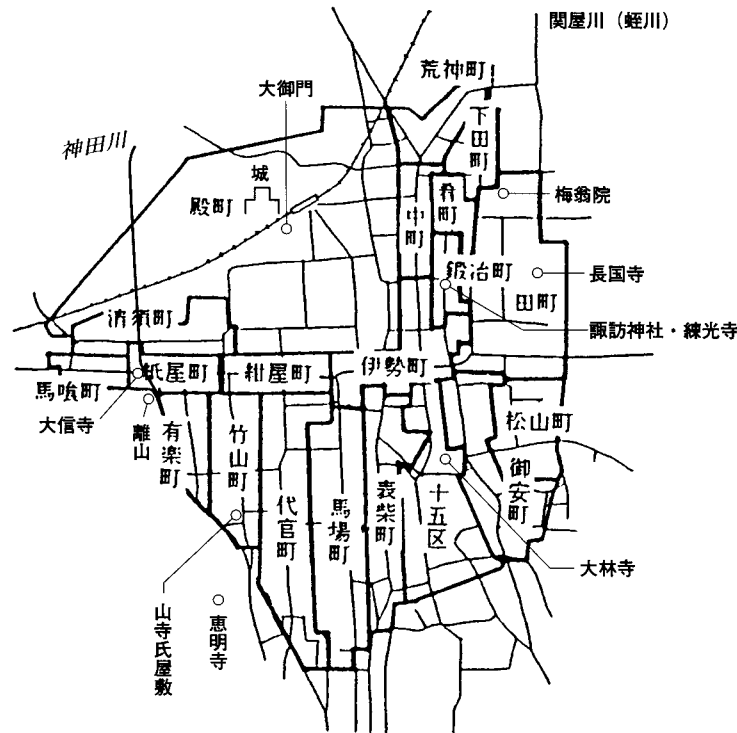


図1 松代の城下

おそらくは竹山町で決壊した土石流がこのあたりで土砂だけを残していったものであろう。7～8尺の堆積があった。伝八の家の前では砂が1丈溜まり、北国街道に坂ができたという。

代官町では別儀はなかったが、北側では被害が大きかった。おそらくは神田川で決壊した水の影響があったのであろう。

関屋川の影響を受けたのが十人町や鍛冶町など城下の東側の町である。練光寺・諏訪神社には水が入った。梅翁院附近は残らず埋もれた。長国寺では7～8尺の水があった。

以上が城下の水害のあらましである。

松代城下にあつては、こうした水害に対処する方法として、城下の水路体系を整備することによって水害を防ごうと考えていた⁽¹⁵⁾。殊に、各家に設えられた庭園にはそれぞれ泉水（池）があり、泉水をつなぐ泉水路が整備されていた。この泉水路は、単に鑑賞用の池に水を引くのみならず、「下流での都市型洪水を防ぐための遊水池機能」を持たせていたのである⁽¹⁶⁾。泉水路は神田川沿いに発達していた。このことからすると、松代城下の各町によってそれぞれ違った被害状況であったのは、おそらくは、こうした泉水路の遊水池機能がある程度発揮していたか否かによって左右されたためと想像される。ただ、泉水路が近世初頭からすでに整備されていたか、あるいは戊の満水を教訓に完備されたものであるかは不明であり、今後の検討に委ねるところでもある。

(4) 城下町に流れ込む川の被害

城下町松代の水系は大きく関屋川水系と神田川水系とにわけられる。また、城下の東を少し離れ

て藤沢川が流れている。関屋川水系と神田川水系とを分かち馬の背状の微高尾根は、城下の中心にあった。城下町の東半分の関屋川水系では、湧水が豊富であるため、城下町建設以前は水系として整備されていなかった。一方、城下町の西半分の神田川水系では、扇状地扇端部を除いて湧水がなく、良質の水は得られなかった。神田川は天井川として川底をけずっているため、神田川水系の流量を減少させている⁽¹⁷⁾。

戊の満水によってこれら河川の上流域では、どのような被害があったのかについてつぎに述べよう。

神田川上流においては、山崩れが深刻な状況であった。上流の西条村⁽¹⁸⁾（長野市松代町）では、「山拔」や「石砂入」によって11軒の家屋が倒壊している。また、11軒が河川によって「押流」され流失している。神田川の下流域にいたると既に述べたように、神田川の決壊した流れが大信寺の真ん中を流れるようになった。この流れは、西側の新馬喰町にまで及び、38人もの人たちが濁流にのみこまれ行方不明となっている。神田川が運んだ土砂は城下の中央町である代官町などに運ばれたが、水の勢いは城下西に向けて流れ去っていったことが推定される。

関屋川上流に位置する関屋村⁽²⁰⁾（長野市松代町）では、「山拔押潰」によって家が流されたり、「押潰」されたりした家が12軒あった。また、川の増水によって「流」される家も24軒あった。これによって行方不明になったのは5人であった。

藤沢川上流の東条村⁽²¹⁾（長野市松代町）では、「満水に付流」れる被害が報告され、11人が行方不明となった。このなかには子供が多く含まれていた。東条村周辺の人家にあっては、「山拔」すなわち山崩れや土石流による被害が確認できない。もしかすると、藤沢川流域は水かさが増しただけで、土砂崩れの影響が他の河川に比べ少なかったと思われる。

藤沢川の下流に位置する寺尾村（長野市松代町東寺尾）の福德寺では、「唐紙畳」が残らず水に浸かったと報告された。床上浸水であった。また、藤沢川との直接的な関係は想定できないかもしれないが、柴村⁽²²⁾では、45軒が川に流され、54人が行方不明となっている。このことから、千曲川からの増水に加えて、藤沢川からの流れ込みをも考慮する必要があるであろうと思われる。

さて、このように城下町は千曲川からの増水によるばかりではなく、城下の南山地から千曲川に流れ込む三つの河川の濁流や土石流による被害が甚大であったことが想定されるのである。関屋川上流の関屋村での土砂崩落、同じく神田川上流の西条村における土砂崩れがあげられる。反面、藤沢川については、土砂崩れによる被害が確認できない。どうも、皆神山を境として、河川災害の様相が異なっていたとも考えられる。

このような3河川による被害は、おそらくは松代城下の建設に伴う、無理な河川流路の変更がもたらした結果といえる。

近世初頭に成立した『信濃国中条宮縁起』⁽²³⁾によれば、東寺尾の寺尾氏と、鞍骨城（清野）の清野氏の勢力争いがある、その勢力は小鮎沢と鰐沢という流れによって二分されていたという。勢力の中間点には中条という地籍がある、ここには宗像宮弁才天の茅屋があったという。この中条宮弁才天の位置は、江戸時代中頃に成立した松代城下町図に記載がある。これによれば、城下の東にこの宮があり、寺尾氏・清野氏の勢力の拮抗する位置であったことがわかる。このように中条という地籍は、江戸時代以前には開発の進まない場所であったものの、江戸時代のはじめ、城下町が

築かれるようになり、新たに開発された土地であると言える。

さて、この小鮎沢の本流である関屋川の流路について見てみよう。

江戸時代半ばまで、関屋川は城下にはいると、本丸を囲むかたちで二又に分かれていた。これが、江戸時代の後半になると、城下を避けて東側にそれるように改修されている。改修された時期は不明であるが、戌の満水前後の絵図面と文政頃の絵図面では、明らかに関屋川の流路が変わっているのである。おそらくは、戌の満水により被害が甚大であったために改修がなされたのではなかろうか。

(5) 松代城の被害

松代城の被害は極めて深刻であった。このため、松代城の被害の様子が11月11日から5回にわたって報告がなされていた。このうち、絵図面を用いて報告されたのは、一番はじめの11月11日と、12月5日であった。こうした絵図面のうち、松代城の被害の様子を示した図が真田宝物館所蔵の「矢沢家文書」のなかに含まれている(図2)。この図には、寛保2年11月に報告された水害後2回目の届けが書かれている。ただ、絵図面からするとその前後の様子も描かれているようで、水害後における城の最終的な被害報告であると思われる。また、この絵図面は、拝借金獲得のために文書に付随するかたちで作製された原本を写したものであると思われる。実際、寛保2年12月29日には、1万両拝借が許された。

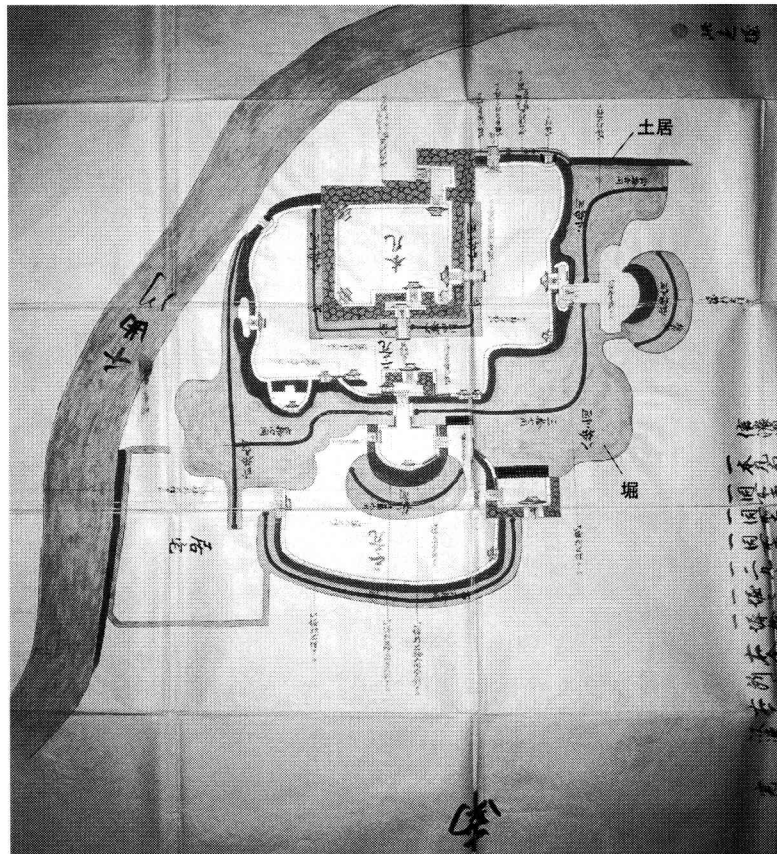


図2 松代城の被害を示す図(矢沢家文書)

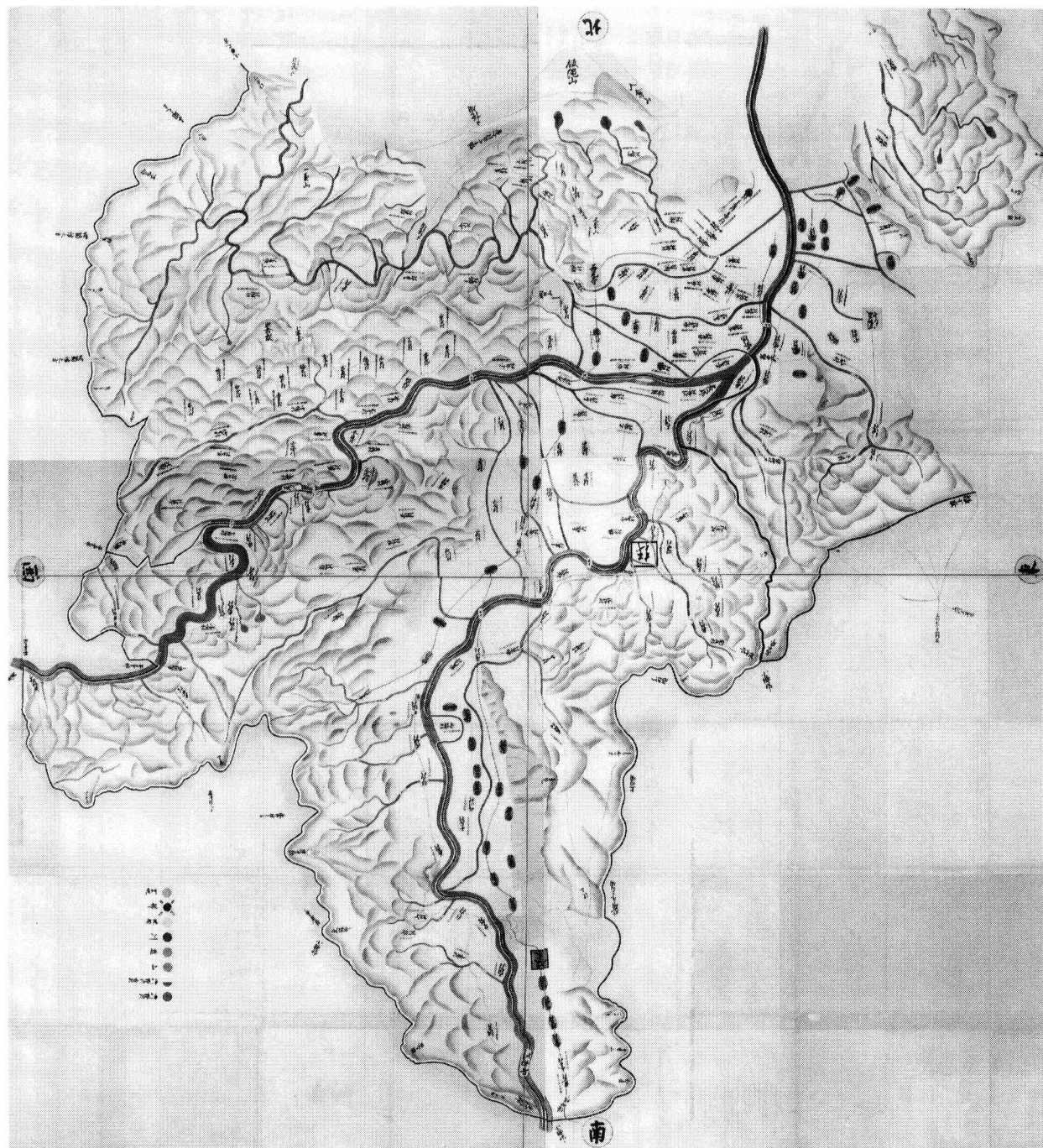


図3 「水害図」 水害前の図

この絵図面に記された本丸石垣の被害の様子を見ると、石垣は南と東に重大な被害があった。また、城の堀の被害も南に集中している。このことから、おそらくは神田川からの濁流が直接本丸の石垣にあたり、被害を引き起こしたと考えられる。

②……………長野市立博物館所蔵の災害絵図

(1)「水害図」について

長野市立博物館が所蔵する「寛保満水図」（以下、「水害図」という）は、浦野家文書中の1点と

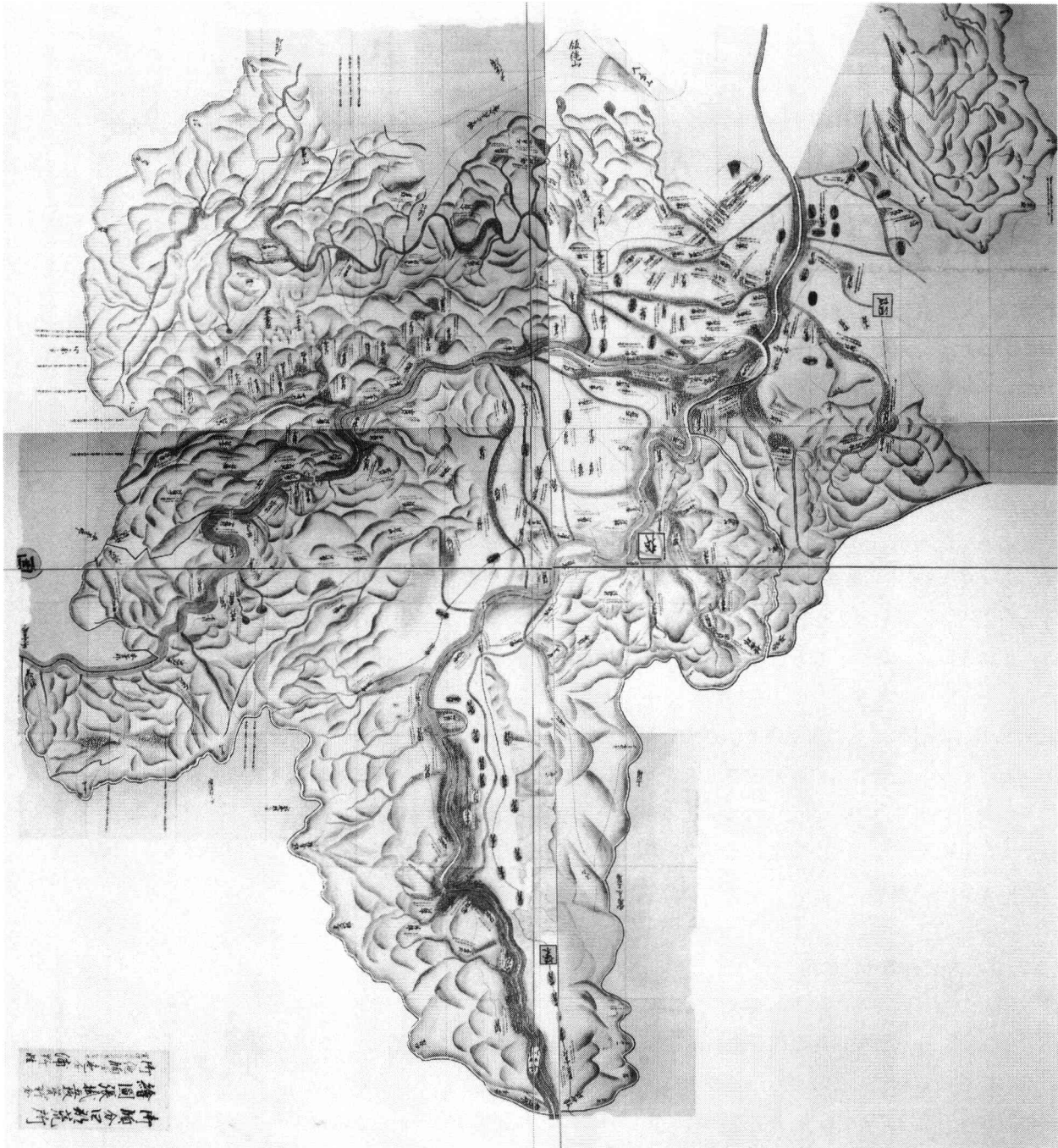


図4 「水害図」水害後の災害図

して、昭和54年に長野市教育委員会が長野市松代町の浦野房次郎氏より購入した資料である。この資料群の特徴は、普請に関わる絵図類が多いということである。⁽²⁹⁾

さて、「水害図」は水害前の様子を示した図と水害後の被害をあらわした図の2図からなる。水害前の絵図には、山（山の名）や河川（河川の名）のほかに村名が書かれており、水害後の絵図面には、水害前の絵図面をもとに荒地の場所の様子が、斑模様で示されていて、水害の広がりがよくわかるようになっている。また、村名のところには、村高と荒地の石高が記されている。欄外には、絵図面には描ききれなかった山崩れの場所を注記している。これは描いた山の裏側については記号化できなかったため文字によってあらわしたのであろう。真田宝物館が所蔵する、弘化4年に

起こった善光寺地震の被害の様子を描いた「信濃国地震大絵図」⁽³⁰⁾に比べると、こうした裏山の災害の様子を描き表せないという点で技法的に見劣りがする。このことからすると、江戸時代後期以前の絵図である可能性はさわめて高い。

「水害図」は現在、両者ともにパネルに貼られており、これを組み合わせることで展示ができる仕組みとなっている。このように、パネルに張り合わせるという仕様になったのはそれほど古いことではなく、長野市立博物館に移管されてからのことである。この図は、本来、切絵図のような形態であった。それは水害後の図のパネル右下に、「御領分四郡荒所絵図 張掛五枚荒所分 御他領分色分 浦野姓」と書かれた貼紙があり、また異筆で「寛保二戌年八月大満水之図也」と書かれている。この貼紙は、「水害図」を納めていた袋の表書であったと思われる。このように考えると、本来の形態は5枚の絵図を「張掛」するものであったことがわかる。戌の満水の災害絵図として紹介されてきたのは、このように収納された袋の表題をうけてのことであった。

ところで災害絵図について北原糸子氏⁽³¹⁾は、その制作目的などをカテゴリーとして四つに分類している。それは、A 諸藩が御用絵師などを使って、災害の地変を描かせ、災害の実態をとらえようとしたもの、B 村役人などの半公人が自村の被害を報告する、あるいは自己の体験を後世に伝えるために記録化あるいは描写したもの、C 個人の見聞記類、D 災害を絵図や物語に仕立てたり、かわら版などの木版印刷にして、書物問屋、絵双紙屋、あるいは街角で読み売るなど、大量生産、大量消費用に作られるもの、である。この分類に従えば、「災害図」は明らかにAに当てはまるものである。とすれば、この絵図の観覧対象者は藩主などの為政者であり、制作目的は災害の実態把握にあったといえる。⁽³²⁾言い換えるならば、松代藩において、藩主かそれに近い人物が専門の絵師に描かせたものと言うことができ、その作成意図は、松代領内における水害の被害状況の把握にあったといえるのである。

(2)「水害図」の年代比定

さて、この「水害図」が戌の満水を示す図であるのか疑問点が多い。問題点を抽出しておこう。

表2-1は、前章で検討した国役金の延納願届に示された村高と「水害図」に示されたものとの差を示したものである。このうち、表2-1には、石高の差が100石以上のものを羅列した。表2-2はその差が9石以下のものである。差が特に著しいのは、大豆島村である。ここは千曲川と犀川の合流点である。このほかの村についても、その多くは千曲川や犀川に面した水害の常習地帯である。一方、表2-2のように石高の差がほとんどない村をみると、河川から離れた村はあるものの、明確にし得る共通項は見つからない。むしろ、戌の満水で被害をうけた村も含まれている。

こうした点を考慮すると、石高の違いについての説明として、絵図面に示される村高は永引されたものとも考えることも可能である。絵図面に示された村高は例外なく国役延納願の石高より少ないため可能性だけ指摘しておきたい。また国役延納願における村高のデータは、一毛のみを取っているものであり、「水害図」については一毛には限らない荒所である点でも共通のデータとはいえない。

以上のことから導き出せる結論として、「水害図」は、国役金の延納願に付随する災害図という性格を持つものではなく、戌の満水を含めた何らかの水害図として、公的な記録として作成・利

表2 寛保満水御届の村高と絵図村高との差 (単位: 石)

1 石高の差 100石以上

郡 名	村 名	御届村高	絵図村高	御届村高 - 絵図
水内郡	布 野 村	412	129	283
水内郡	瀬 戸 川 村	768	648	120
水内郡	中 条 村	786	643	143
水内郡	風 間 村	691	406	285
水内郡	北 長 池 村	741	557	184
更級郡	新 山 村	495	372	123
更級郡	山 田 村	792	591	201
更級郡	若 宮 村	456	311	145
更級郡	羽 尾 村	721	376	345
更級郡	本 八 幡 村	2,469	2,156	313
更級郡	向 八 幡 村	468	354	114
更級郡	桑 原 村	975	765	210
更級郡	二ッ柳村	1,075	862	213
更級郡	五 明 村	1,101	818	283
更級郡	御 幣 川 村	597	442	155
更級郡	会 村	664	502	162
更級郡	大豆 島 村	1,259	185	1,074
更級郡	小 島 田 村	1,793	1,497	296
更級郡	西 寺 尾 村	1,135	854	281
更級郡	東 福 寺 村	2,185	1,405	780
更級郡	横 田 村	525	350	175
更級郡	中 牧 村	736	539	197
埴科郡	内 川 村	438	238	200
埴科郡	粟 佐 村	746	537	209
埴科郡	森 村	1,389	1,259	130
埴科郡	牧 内 村	158	140	18
埴科郡	東 寺 尾 村	821	649	172
高井郡	北 河 原 村	1,510	1,160	350
高井郡	大熊村之内	559	449	110

2 石高の差 9 石以下

郡 名	村 名	御届村高	絵図村高	御届村高 - 絵図
水内郡	下 稲 積 村	101	102	-1
水内郡	妻 科 村	637	632	5
水内郡	茂 菅 村	128	128	0
水内郡	小 柴 見 村	110	105	5
水内郡	小 鍋 村	827	827	0
水内郡	五 十 平 村	261	261	0
水内郡	青 木 村	437	437	0
水内郡	南 長 池 村	487	487	0
水内郡	小 島 村	730	730	0
水内郡	村 山 村	608	608	0
水内郡	南 堀 村	355	355	0
水内郡	下 越 村	246	246	0
水内郡	押 鐘 村	236	236	0
更級郡	山田新田村	41	41	0
更級郡	小 松 原 村	907	907	0
埴科郡	金井村之内	62	62	0
埴科郡	雨 之 宮 村	1,986	1,986	0
埴科郡	加 賀 井 村	143	143	0
埴科郡	田 中 村	463	463	0
埴科郡	小 出 村	456	456	0
埴科郡	宇 原 村	36	36	0

用されたものと推定される。では、戊の満水の災害図とすべきかどうか、もう一度水害の様相を比較しながら検討したい。

(3) 「水害図」の被害状況

「水害図」・水害後の図には、村別の石高と、損耗高が記されている。これらのデータのうちから、先の方法と同じように損耗率を導き出し、これが45%以上の村を集めて表3にまとめた。表3-1から表3-3は、千曲川流域のものである。表3-1は松代藩領千曲川上流の村々のものである。表3-2は、埴科郡内の松代城下周辺の村である。表3-3は松代領から須坂領内における村（城下から犀川合流点を含めて高井郡須坂領まで）のものである。表3-4と表3-5は犀川のものである。表3-4は松代領内犀川の上流部から水内郡小市村までの範囲である。表3-5は小市村から千曲川との

合流点までのものである。

表3-6は、千曲川と犀川の支流の被害状況を示したものである。絵図に描かれている支流としては、①浅川・駒沢川、②裾花川とそこから取水される用水、③土尻川、④川中島三堰、⑤鮎川・百々川・保科川、⑥福沢川・小網沢川、⑦篠井川がある。表3-7は、山崩れの様子を示している。

ここから次のことが明らかとなる。

表3-1、表3-2からは、千曲川の満水の被害は、千曲川の水量が増しての冠水というのみならず、どうも千曲川に流れ込む河川からの影響も多分にあったことがわかる。

松代城下周辺を示す表3-2を概観すれば、関屋川沿いの関屋村、牧内村、加賀井村、それに表3-7に示されるような神田川上流の西条村は、災害の状況は前章で検討した災害の様相と非常に似通っている。

表3-3からは、千曲川と犀川の合流点における冠水が甚だしいことがわかる。殊に、合流点にあたる牛島村（長野市若穂）は94%の損耗率になっている。また、牛島村を中心として千曲川の上流、犀川の上流に沿う村の名がみえる。

表3-4からは、いわゆる松代領⁽³³⁾の山中という地域における犀川の様子が示されている。須牧村（長野市信更町）は村が壊滅状態である。この村は、土尻川が犀川に合流する対岸にある村で、名勝として知られる久米路橋がある。この地点は犀川の流れが狭められるところである。このため、おそらくは犀川と土尻川の水かさが増し、流れが滞ることによって集落が水中に没したのであろう。

表3-5の犀川流域の様子を見ると、表3-3と同じく、松代領内の犀川の被害は、千曲川の合流点に近い村であることがわかる。絵図を見ると、犀川の川幅が、裾花川が合流するあたりから千曲川に合流するあたりまで非常にひろがっていることがわかる。

表3-6によれば、裾花川が犀川に合流する小柴見村（長野市）、土尻川が犀川に合流する大安寺村（長野市七二会）、保科川沿いの保科村（長野市若穂）、百々川が千曲川に合流する幸高村（須坂市）が甚大な被害をうけている。このうち、保科村については、保科川がもたらした土石流が被害を大きくした要因になった可能性が指摘できる。

表3-7は河川沿いではないが被害の甚大であった村を示す。これらは山崩れが起こった村を示し、松代領内の山中といわれる地域に集中している。犀川の支流である土尻川に流れ込む梅木川流域の被害はとて大きく描かれている。おそらくは山崩れによるものと思われる。この水害と直接関係するかは不明であるが、梅木川の上流部には「大崩」という地名がある。「水害図」をみると、この「大崩」地籍付近は大きな被害があったように描かれており示唆的である。

こうした山崩れの様子は、「水害図」とは合致しないものの、明和2年の被害状況が参考になる。⁽³⁴⁾

この年、4月14日より6月1日まで雨が降り続き、山拔が705カ所あったという。殊に、成就村と上野村（ともに小川村）の山拔は規模が大きく、抜け口から30町ほどすべって止まり、横が12町、高さ20丈にのぼった。土砂崩れによって、人家や田畑を押し崩した。またこの土砂は土尻川・埋牧川・草沢川をせき止め、東西36町、南北20余町、深さ18丈にも達した。せき止められた水によって、176軒の家が水の中に沈んだ。1608人の人が家を失い野山に小屋かけをした。支配役人は現地に赴こうとしたが、水が溜まったため通路を失い、筏を組んでようやく被災地にたどり着いた。このせき止められた水がいつ決壊して下流の村に被害を与えるかが最大の問題となったら

表3 洪水絵図の分析 45%以上の損耗率の村(単位:石)

1

郡名	村名	絵図村高	荒地高	荒地率
更級郡	力石村	546	406	74.3%
更級郡	中牧村	539	354	65.6%
更級郡	須坂村	253	170	67.3%
更級郡	網掛村	306	204	66.4%
埴科郡	鼠宿村	888	536	60.3%
埴科郡	向八幡村	354	336	95.0%
埴科郡	内川村	238	238	100.0%
埴科郡	千本柳村	364	364	100.0%

2

郡名	村名	絵図村高	荒地高	荒地率
埴科郡	関屋村	319	172	53.8%
埴科郡	牧内村	140	69	49.6%
埴科郡	加賀井村	143	103	72.1%
埴科郡	東寺尾村	649	417	64.3%
埴科郡	柴村	199	122	61.4%
埴科郡	岩野村	639	509	79.6%
埴科郡	紙屋町	171	171	100.0%

3

郡名	村名	絵図村高	荒地高	荒地率
水内郡	布野村	129	105	81.7%
水内郡	村山村	608	322	52.9%
更級郡	真島村	1,569	868	55.4%
更級郡	西寺尾村	854	479	56.2%
埴科郡	牧島村	190	88	46.3%
高井郡	川田村	2,022	1,325	65.5%
高井郡	相之島村	117	87	74.6%
高井郡	福島村	868	575	66.3%
高井郡	牛島村	685	644	94.0%
高井郡	大室村	834	582	69.8%

4

郡名	村名	絵図村高	荒地高	荒地率
更級郡	須牧村	26	26	100.0%

5

郡名	村名	絵図村高	荒地高	荒地率
更級郡	川合村	1,417	1,022	72.1%
更級郡	川合新田	177	176	99.2%
更級郡	網島村	941	814	86.4%
更級郡	丹波島村	570	392	68.8%

6

郡名	村名	絵図村高	荒地高	荒地率
水内郡	小柴見村	105	49	46.4%
水内郡	大安寺村	202	98	48.4%
更級郡	上平村	530	266	50.2%
高井郡	小出村	456	298	65.4%
高井郡	保科村	1,356	684	50.4%
高井郡	幸高村	23	23	100.0%

7

郡名	村名	絵図村高	荒地高	荒地率
水内郡	新安村	88	44	49.3%
水内郡	橋詰村	516	236	45.7%
更級郡	桑原村	765	664	86.8%
埴科郡	西条村	1,275	603	47.3%

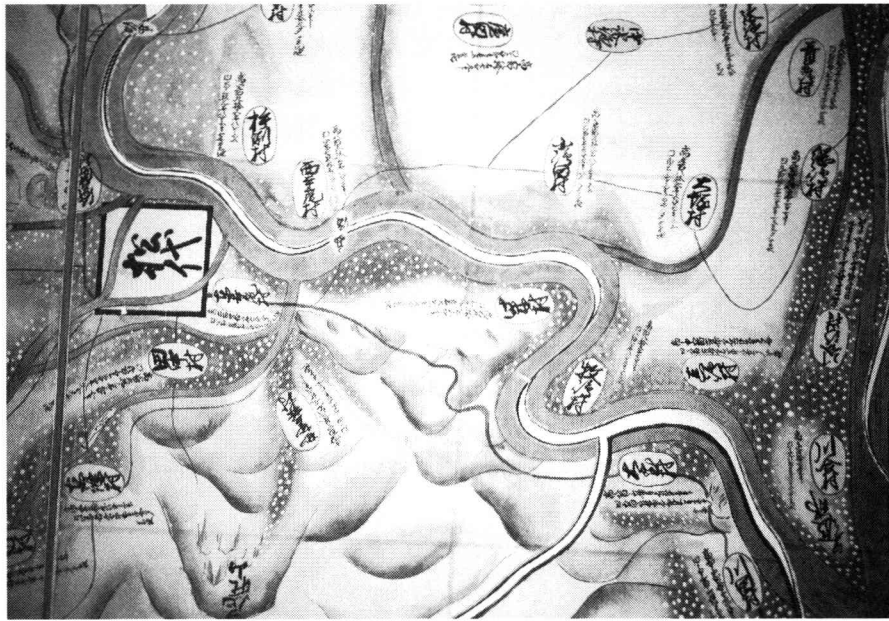


図5 松代城下周辺



図6 千曲川・犀川合流点周辺

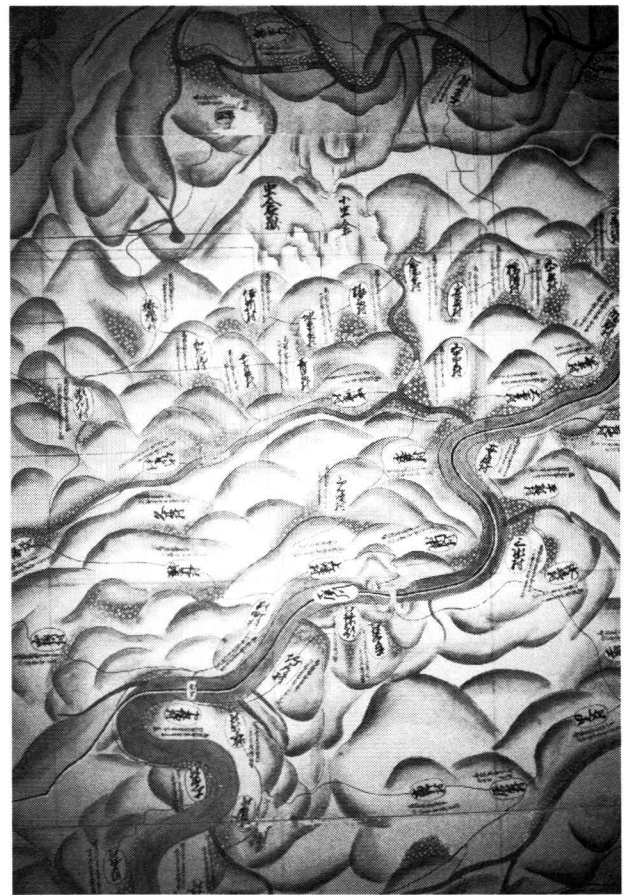


図7 山中のようす

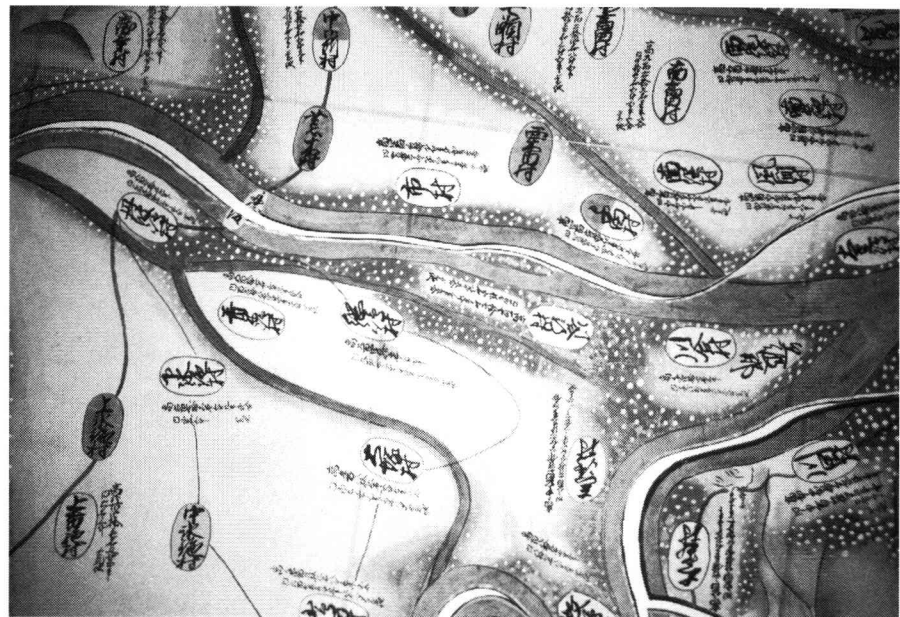


図8 犀川流域のようす

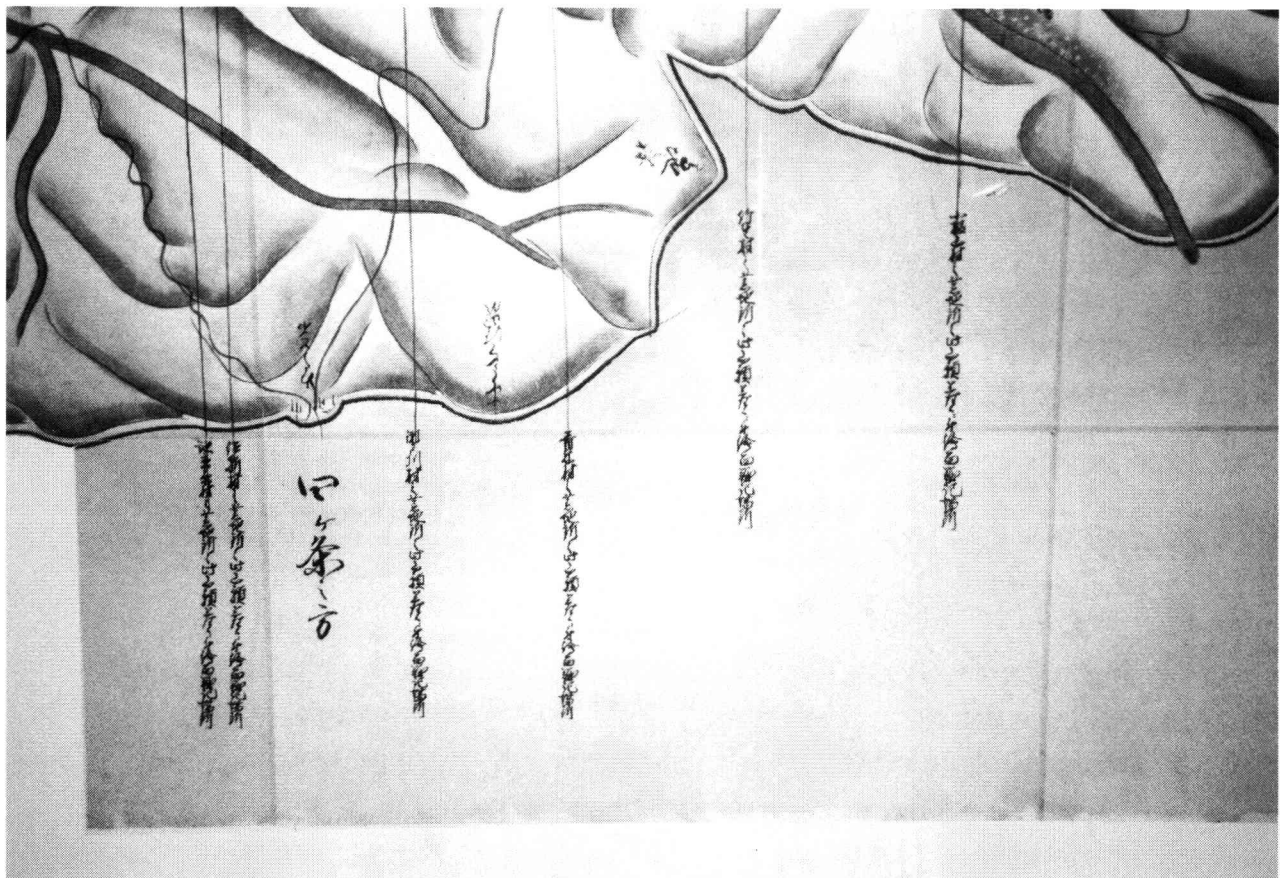


図9 「災害図」欄外の記録

しい。その後の様子については史料が欠けており不明である。

さて、このように土尻川沿いやその支流における土砂崩れは、人家や田畑を押し流すのみではなく、その崩落した土砂が中小河川をせき止め、村を埋没させるという二次災害をも引き起こしていたのである。このような災害の様相は、明和の災害のみに見られるものではなかったと思われ、当然のことながら、戊の満水にも見られたと想像される。

既に述べたように、「水害図」には山崩れが多く描かれている。ただ山崩れと河川がもたらした水害との区別が絵図面上ではなされていないため、両者を識別できないが、ほぼ松代領内にあっては、山中に山崩れが集中している。一方、絵図の欄外に注記されている描くことのできなかった山崩れの情報は、「岩草村之荒地所之此山顛御座候ニ付 絵図面難記場所」といったように記されている。このように欄外に注記された山崩れの場所は、14カ所で10カ村になる。

以上のように「水害図」の特徴の一つとして、山中にあっては山崩れが多くあったことがあげられる。

(4)「水害図」と寛保の洪水

今まで、幕府への災害届けと「水害図」を個別に検討してきた。それでは、「水害図」を戊の満水の水害絵図と考えてよいのかどうかを検討したい。

従来、この「水害図」はその袋書によって戊の満水の水害絵図として扱われてきた。たしかにこれまでの検討からすると、水害の様相は、千曲川流域、犀川流域、千曲川・犀川の合流点より下流、山中に至るまで、非常によく似ている。多少の誤差や、戊の満水の被害の検討に用いた史料自体が国役金の延納願いということを考慮に入れると、問題とする必要がないようにも思われる。ただ、もう一步踏み込んで「水害図」の可能性を考えてみたい。

寛保以後の水害としては、宝暦7年(1757)の千曲川の氾濫があり、この時三万四千余石の「永荒地」と五万千余石の損耗高があった。このため、幕府から1万石の拝借金が認められた。

もう一つ、既述の明和2年の洪水がある。この水害は、犀川がいつもより2丈3尺水面が上がり、千曲川の水面が1丈5尺上った。損耗高は5万3,865石で山拔が非常に多かった。

その後もいくらかの水害があったが、上記の二つの水害が寛保以外のもので被害の大きかったもので、「災害図」に比定できそうなものである。ただ、例えば明和の水害を例にとると、先に見たように瀬戸川沿いの災害のような、被害の様相が明確なものを丹念に突き詰めていくと、「災害図」とは合致しない部分もあり、明和の水害をあらわした災害絵図とはなし得ない。また、宝暦の水害についても、明確な被害状況を得ることができないため判断に苦しむのであるが、どうも「水害図」とは様相を異にするようである。

「水害図」を戊の満水の水害資料的なものと考えれば、あながち藩の公式記録と齟齬するからといって否定的な見方をする必要もないように思われる。すなわち、藩が直接作成した図をもとにして、浦野氏が何らかの理由で私的に情報を集めたものであったと考えてもよいと思う。戊の満水後まもなくの頃写されたか、あるいは江戸時代後期に写されたものと考えられるのである。

このように、袋の表書にあるように、「水害図」は戊の満水の水害絵図面としてよいように思う。

③……………寛保満水後の復興策

(1) 千曲川の流路変更と城下の安定

現在の千曲川の流路は、戌の満水以後に付け替えられたものであるといわれている。近年では、原八郎五郎による藩政改革の一環としてなされたのではないかとされている。しかし、この点は確たる史料を見出すことはできずに結論はない。

千曲川に面した、更級郡東福寺村（長野市篠ノ井）が伝えた文書群のなかに、千曲川の流路付け替えの際作成された数枚の絵図面があった。これによって、千曲川を松代城下から北に遠ざけるための作業が、非常に長いスタンスをもって行われていた可能性が指摘された。⁽³⁵⁾ このいくつかの絵図面をつきあわせると、どうも千曲川の流れを一度に変えたわけではなかったことがわかる。概略を述べると、まず延享4年（1747）ころに普請工事がはじめられた。現在の千曲川流路の掘削がはじまったのである。そして、宝暦10年（1760）頃には今の千曲川の流路に水が流れるようになった。ただ、水害のたびに川欠けが発生するため、文化4年（1807）には、旧千曲川流路のせき止め工事が行われた。旧流路が完全にせき止められたのは天保11年（1840）ころと思われる。

一方、真田宝物館が所蔵する「松代の図」によれば、城下附近の千曲川が城下に直接あたるものと、城下を避けた現在の流路との二つの流れがあったことが知られる。「松代の図」は松代の町を北西方向から鳥瞰的に描いているもので、作者は三村自閑斎。⁽³⁶⁾ 82歳の時に描いたものである。自閑斎は松代藩の御用絵師で、寛政8年（1796）ごろに亡くなっている。狩野派の流れを汲む画家である。「松代の図」の成立は18世紀末と考えられている。このことからすれば、千曲川の流れは、

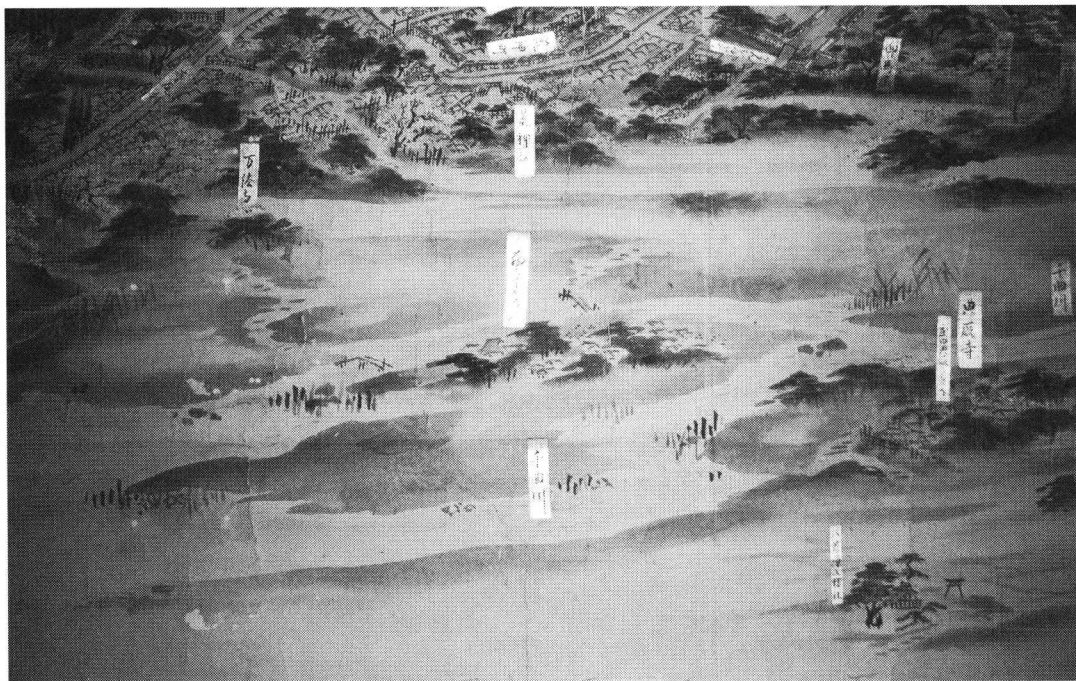


図10 「松代の図」下に描かれた千曲川

新しい流路と、従来の松代城下に向かう流路が江戸時代の後半まで併存していたことが裏付けられるのである。

(2) 合流点の復興

千曲川と犀川が合流する地点は、水害の常習地点である。

この合流地点の改修については、千曲川流域としては珍しい、輪中が形成されたことで知られている。⁽³⁷⁾牛島村では、江戸時代半ばくらいまでは荒れるにまかせるといった状況であった。しかし、水害から村をまもるために、輪中の形成がなされた。

千曲川・犀川の合流地点で水害が起こるようになったのは、おそらくは裾花川の改修工事が直接の影響を及ぼしていたものと思われる。

裾花川は、現在の鬼無里村や戸隠村などに源を発する川である。長野市北西部の溪谷を抜け、善光寺平へ流れ込んでいる。善光寺平に入ると古くは直接千曲川に流れ込んでいたが、今では、現在の県庁あたりから流れを変えて南下させて犀川に合流している。このような裾花川の流路改修については、江戸時代の初頭にそれがなされたといわれてはいるものの、具体的なことはわかっていない。⁽³⁸⁾嘉永5年(1852)に作製された松代領内の河川・用水の絵図によれば、⁽³⁹⁾裾花川の東側に何度も護岸工事が行われているのが見受けられる。実際、「水害図」などに見られるように、裾花川の流路変更の付け替え地点である小柴見村周辺は裾花川の増水によって被害をうけている。このように、裾花川の流路改修は、逆に流域村への被害を増やす結果ともなっていたのである。あわせて、犀川の水量を必然的に増やし、結果、千曲川・犀川合流点への被害を増幅させたのである。

裾花川が改修された後、裾花川を水源とする善光寺平の用水路への被害も増幅させた。「水害図」にも、裾花川で押さえ切れなくなった水が、裾花川を水源とする鐘鑄堰や八幡堰などの用水路に流れ込み、⁽⁴⁰⁾用水路周辺の村の被害を増幅させている様子が描かれている。

(3) 松代城下のその後

さて、寛保の水害は松代城下に甚大な被害をもたらした。城下町の壊滅的な被害を経験し、その後の復興にあたっては城下町を水害からいかに守るかも検討されたものと思われる。さきにみたような、千曲川の流路変更はこの一つの方策でもあった。それとともに、松代城下へ流れ込む河川の改修、ともすれば、先に指摘したような城下町の泉水の整備も⁽⁴¹⁾こうした政策の一環であったのかもしれない。

戊の満水以後、城下の被害がどのように推移したかを概略述べる。まず戊の満水の水害について確認しておきたい。この時の被害は⁽⁴²⁾「橋流五箇所、流家七十五軒、潰家一〇六軒、流死人三十九人、流死馬十五疋」であった。この時の損耗高は5万9,368石、在方にあつては、流家1,731軒、潰家857軒、半潰家254軒、流死人470人であった。

その後に起こった二つの大きな水害について、被害が明確なものを取り上げて対比してみよう。

明和2年(1765)に起こった水害では、⁽⁴³⁾城下の被害は「侍屋敷川欠込三軒、半潰家十六軒、潰家十九軒、寺大破一箇所、町屋敷流家一軒、半潰家二軒、橋流損二十四箇所、家中町用水堰損三百二十一間」であった。この時の損耗高は5万3,865石で、在方にあつては流家55軒、潰家221軒、

半潰家 500 軒、流死人 25 人であった。

もう一つ安永 8 年 (1779) に起こった水害は、城下の被害は侍屋敷の半潰家 1 軒・潰家 36 軒、流番所 1 カ所、町屋の流家 2 軒・潰家 2 軒・半潰家 5 軒・損家 181 軒、橋流れが 2 カ所、橋損が 5 カ所、用水堰損が 420 間であった。ただ、城は無傷であった。この時の損耗高は 1 万 4,633 石であった。加えて永荒として永荒 3 万 3,000 石に、明和 2 年の損耗 8,500 石が永荒となっていた。ちなみに在方では、流家 9 軒、潰家 30 軒、半潰家 65 軒、損家 390 軒、流死人 15 人であった。

寛保以降、2 例の城下の被害状況が確認されるのであるが、戌の満水に比して極めて被害が抑えられていることが明らかとなる。ただ、これらの災害がすべて同じ条件で起こったものとは考えられないので、一概に論じることは謹まなければならない。また、在方の被害状況を見ても、戌の満水とは比較にならないほど被害が少なく、検討の対象とはならないかもしれない。とはいえ、殊に安永 8 年の水害についてみれば、松代城自体に被害がないといっているところからすれば、城下の水害対策がある意味で功を奏したと考えられよう。

まとめ

以上、雑多な検討を加えてきたが、本稿で導き出された結論を提示しておきたい。

まず「水害図」の位置づけであるが、戌の満水をしめす災害絵図とは明確にできないものの、非常にそれと近いものであろうと考えられる。ただこの図が善光寺地震の災害絵図である「信濃国地震大絵図」のように、ある意味での政治向きに利用されたかどうかは確認できない。むしろ、災害を記録として残すという意図が見受けられる。

一方、戌の満水の様相としては、①松代城下に見られるような数日間にわたる千曲川の満水がある、②千曲川などの河川に流れ込む支流の増水とその決壊があり、これによる被害が大きい、③おもに西山地区に見られるような、山間地における山抜けとそれによる河川のせき止め、その後の決壊に伴う土石流、などがあげられる。

戌の満水を経験した松代藩が行った復興策は、まずは城下の安定を最優先したであろうと考えられる。城下町が建設されるまで、ここはおそらく神田川、関屋川などの影響を受けやすい場所であったと思われる。そのため、河川のコントロールは重要な問題であった。まず、よく知られたものとして、千曲川流路の改修がある。松代城の脇を流れていた千曲川を、城北の現在の場所に移した。それとともに、神田川や関屋川などの城下に流れ込む川の改修もなされた。関屋川にいたっては、江戸時代の後半になると城下町の東側を流れるルートに変更になっている。

戌の満水によって、村での自衛的な普請が行われている。例えば牛島村に見られるような輪中の形成である。また、堤防工事などにも自普請が見られる。こうした普請も、水害のたびに同じような場所が決壊している。寛政元年に堤防の普請願いが出ているが、これによれば、安永 8 年と天明 3 年に決壊した堤防をまた改修したいという願いをだしている。⁽⁴⁵⁾ このことからすると、水害によって決壊する場所はそのほとんどが普請所やそこに近い場所であることが分かる。そのため、同じ普請所をいかにもたせるかが重要であったと思われる。

近世初頭における裾花川の改修や、松代城下の建設など、大規模開発が続いたことにより、従来

経験したことのない、大規模な水害が新興地域を襲った。こうした城下町などの水害対策が問題になり、解決策を本格的に見つけはじめるときかけとなったのは戊の満水であったといえよう。

註

- (1)——大平喜間多編集 昭和4年
(2)——『長野県史』通史編 第5巻 昭和63年
(3)——同上
(4)——『長野県史』近世史料編 第7巻(2) 1724号 文書
(5)——註(2)と同じ
(6)——更埴市誌編集会編集 昭和63年
(7)——更級埴科地方誌編集会編集『更級埴科地方誌』第3巻近世編下 昭和56年
(8)——『長野県史』近世史料編 第7巻(3) 2248号 文書
(9)——『同上』同巻 2249号 文書
(10)——矢代堰については、前掲『更埴市史』巻2 近世編 第5章に詳しい。
(11)——註(9)と同じ
(12)——前掲『更埴市史』巻2 近世編 第6章
(13)——三堰とは、犀川の犀口という場所から取水される川中島平の用水、上堰・中堰・下堰の三つを総称している。
(14)——前掲『長野県史』通史編 第5巻
(15)——長野市教育委員会『庭園都市 松代』昭和57年
(16)——同上
(17)——同上
(18)——前掲『松代町史』下巻 所収文書
(19)——同上
(20)——同上
(21)——同上
(22)——同上
(23)——『続群書類従』巻第74
(24)——太田博太郎「松代町の民家」『信濃の民家』所収 昭和51年
(25)——真田家文書(真田宝物館所蔵) 30-7-2
(26)——同上。これは埋もれた城の堀についての届け出である。
(27)——同上。これは城の石垣崩れ・堀埋・橋落ち・塀倒れについての届け出である。
(28)——「真田家家譜」信安の項 『真田家文書』中巻
(29)——この史料については、例えば前掲『更級埴科地方誌』上巻において詳しく取り上げられている。
(30)——これについては、善光寺地震災害研究グループ『善光寺地震と山崩れ』(平成6年)などがある。
(31)——「災害絵図研究試論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集 平成11年
(32)——同上
(33)——松代藩領における行政区名である。享保年間以降、領内を山中と里方に分けた。山中とは領内西部に広がる山間地一帯をいう。
(34)——松代真田家文書(国立史料館蔵) 26-Aう-868
(35)——長野市立博物館『千曲川』平成3年、長野市立篠ノ井公民館東福寺分館『千曲川瀬直しにみる村人の暮らし』平成6年、『長野県土地改良史』歴史編 平成11年
(36)——真田宝物館『松代』6号 平成5年
(37)——牛島区誌編集委員会『輪中の村 牛島区誌』昭和60年
(38)——例えば、前掲『長野県土地改良史』
(39)——前掲註(29)に同じ。
(40)——例えば、霜田巖『鐘鑄堰の話』昭和57年
(41)——前掲註(15)に同じ。
(42)——松代真田家文書(国立史料館所蔵) 26-Aう-634
(43)——同上
(44)——同上
(45)——同上

(松代藩文化施設管理事務所、国立歴史民俗博物館共同研究協力者)

(2000年3月17日受理、2001年9月4日審査終了)

Kanpo 2 (1742) “Inu no Mansui” Flood as Depicted in an Illustrated Map

HARADA Kazuhiko

In August of Kanpo 2 (1742) a great flood disaster occurred in the Chikuma and Sai rivers that flow through northern Shinano. A great deal of damage was caused by this flood. This flood is referred to as “Inu no Mansui” (Flood which occurred in the year of the Dog) in northern Shinano.

The Nagano City Museum possesses an illustrated map that is said to depict the extent of the damage caused by the “Inu no Mansui” Flood. This illustration shows in detail the conditions in each village before the flood and the damage caused in each village by the flood. It also shows locations where landslides and landslide damage occurred. As a pictorial diagram displaying the damage from the disaster, this illustration map is among the very old ones of its type remaining in Shinano. However, the only evidence that this pictorial diagram shows the damage caused by the “Inu no Mansui” is an inscription on the bag that held the diagram.

In this paper, the author first examines the extent of the damage caused by the “Inu no Mansui” as extracted from damage reports of the Matsushiro clan of that era. The author details the damage caused by the “Inu no Mansui” as understood from the damage reports. He also verifies the incredible damage caused in the area surrounding Matsushiro Castle by examining observation reports from that period and investigates how the river waters advanced upon the castle town. This paper shows the damage caused by the “Inu no Mansui” after examining records from that era.

Using this basic research as a foundation, the writer has extracted the extent of damage according to the previously mentioned illustration of the “Inu no Mansui” disaster and compared it to aspects of the disaster mentioned in the types of records and considered the illustrated diagram’s characteristics.

After the “Inu no Mansui”, the Matsushiro clan was involved in a variety of reconstruction projects, which included redirecting the flow pass of the Chikuma River as a way of protecting the area around Matsushiro Castle from flood damage. The author considered the Matsushiro clan’s reconstruction plan in the aftermath of the disaster from the viewpoint of changing the flow pass of the Chikuma River.
